
言語批判と「詩人」

ー フリッツ・マウトナー『言語批判論考』(1901-1902) 分析 ー

木村 裕一

1. はじめに

フリッツ・マウトナーは『言語批判論考(Beiträge zu einer Kritik der Sprache)』(1901-1902)のなかで、言語を媒介とした世界認識の不可能性を主張した。彼の言語に対する徹底した懐疑は、言語に対する不信感や既存の言語体系を克服するための芸術的手段の模索といった、いわゆる世紀転換期における「言語危機」をめぐる議論において70年代以降に注目され、『言語批判論考』(以下、『論考』)はその代表的なテキストとして取り上げられた。¹⁾しかし、この70年代におけるマウトナー研究では、マウトナーの言語批判の「失敗」およびそれが抱える「矛盾」を指摘する傾向が強かった。²⁾たとえばキューンは、マウトナーの言語批判の出発点は、自らが抱えていた文学的才能の欠如や、作家としての言語形成能力の欠陥に他ならないとしている。それによれば、マウトナーは結局、「自らを拒んだ、言語によって形成される世界を破壊したい」³⁾という衝動に突き動かされていたにすぎない。したがって『論考』とは、マウトナー自身の作家としての失敗を、言語そのものが持つ構造的な欠陥に対する批判という形で示すものであるという。マウトナーが、言語による伝達行為が不可能であると主張するとき、彼が前提としているのは、一切の不正確さを伴うことのない、完全な相互理解という理想である。そしてそのような完全さに少しでもいたらない事例を、マウトナーは単純に無理解としか見ていない、とキューンは分析している。⁴⁾

1) 70年代における代表的なマウトナー研究として、Weiler(1970), Kühn(1975), Eschenbacher(1977)などを挙げるができる。

2) Vgl. Kampitz(1990), S. 29f.

3) Kühn(1975), S. 292f.

4) Vgl. ebd. S. 54.

つまりマウトナーは、言語を媒介とした「完全なる真理や現実への到達」⁵⁾の不可能性を主張しながらも、反対にそれらを強く希求することになってしまったということである。言語に対する絶対的な懐疑と諦念は、最終的に沈黙、あるいは神秘主義へと陥らざるを得ない。⁶⁾しかしこれは、言語によっては到達できない、非言語的にのみ到達しうる真理や現実を、マウトナーが前提としている限りにおいてである。したがって言語批判は二重の意味で「失敗」しなければならない。ひとつは、言語的媒介による真理や現実への到達の失敗であり、もうひとつは言語批判を言語という手段に頼らざるを得ないという矛盾の帰結としての失敗である。⁷⁾

しかし興味深いことに、マウトナーは『論考』において、非言語的にしか到達しえないはずの真理や現実へとアクセス可能な、特別な「言語」について繰り返し言及している。本論で扱うのは、『論考』における、そのような特別な「言語」としての「詩」、およびそれをコントロールすることのできる「詩人」である。「言語」や「詩」に対するマウトナーの二律背反的な態度は、しばしば『論考』自体が抱える論理的な「矛盾」として捉えられてきた。⁸⁾というのもマウトナーにおける「詩」とは、「言語／非言語」という二項対立において、そのどちらとも言えないような、いわばその境界線上に位置づけられるものだからである。したがって「詩人」もまた、そのような二項対立の境界線上に現れてくるものだと言える。以上を踏まえ、「言語／非言語」という境界線がマウトナーの「言語批判」においてどのように引かれていたのか、そしてその境界線上に位置づけられる「詩」および「詩人」が、言語に対する絶対的な諦念を代表するテキストとして考えられていた『論考』において、どのような意味を持っていたのかについて、考察する。

5) Ebd. S. 72

6) Vgl. Leinfellner/Schleichert (1995), S. 9.

7) Vgl. Eschenwacher (1977), S. 60.

8) ゲッチェは、マウトナーにおける論理的矛盾が、とりわけ詩の言語に関する論証において多く見出されると指摘している。Vgl. Götsche (1987), S. 56f. タルケンもまた、マウトナーの言語批判を「立場のはっきりしない思考」とみなし、「詩的言語の有り様としての(非言語)」を、『論考』が抱える深刻な論理的矛盾として批判している。Vgl. Thalke (1999), S. 228f., S. 239. さらにシュペールは、マウトナーの言語観が個人主義と集団主義のあいだを揺れ動いていることが、『論考』における大きな矛盾の原因であると指摘している。Vgl. Spörl (1997), S. 45f. (Anm. 93). 『論考』における「個人／集団」の関係については、次節で扱う。

2. 「個人／集団」

ここではまず、マウトナーが「言語」をどのようなものとして捉えているのか整理していきたい。マウトナーは、「言語や思考とは行為 (Handeln) である」⁹⁾と定義している。そしてこの定義に加えて、マウトナーは次のように述べている。

我々が思考において語の表象と結び付けているのは、世間一般に言われているように声によって生じる音ではなく、言語を話す際に用いる筋肉の運動なのである。実際このことの裏付けとして、我々は通常、ある文を話した声を思い出すのではなく、文そのものを思い出すという状況が挙げられる。[...]また筆跡 (視覚イメージ) によって思考が連想されるということは非常に例外的である。ゆえに、思考は感覚による知覚と結びついているのではなく、運動感覚と結びついていると概して言うことができるだろう。(KdS, I, 512)

マウトナーはここで言語を、能動的な運動とそれによって生じる運動感覚との関係から捉えようとしている。彼によれば言語とは、音声や文字といった媒体を生じさせるために必要な筋肉の運動であり、マウトナーが「行為」と呼んでいるのは、このような運動のことである。言い換えれば、彼にとって言語やそれを通じた認識とは、受動的な形で与えられているものではなく、「外界 (Außenwelt)」に対する能動的かつ物理的な運動の結果である。¹⁰⁾ この時思考において言語は、運動によって生じる運動感覚を「思い出す」ことによって、「語の表象」と結び付くと考えられている。マウトナーの定義によれば、言語活動とは、「身体運動の軌道やその想起の総体 (die Summe unserer Bewegungsgleise oder -erinnerungen)」(KdS, I, 517) に他ならない。

言語活動を運動感覚の想起と結びつける一方で、マウトナーはコミュニケーションや認識の手段として考えられている言語を、社会成員という集団によって共

9) Fritz Mauthner, Beiträge zu einer Kritik der Sprache, Band 1, Stuttgart und Berlin 1921, S. 517. 以下、同書からの引用は「KdS, 巻数, ページ数」のように表記する。

10) このような考え方の背景にあるのは、思考や認識といった心的現象とされているものを、一元論的に「運動神経の働き」とみなす徹底した感覚主義である。「外界の運動をこちらに合わせて変形させる知覚神経と、それに対する反応を再び発信する運動神経と並んで、運動そのものを言語や思考のなかに見出すことができたというだけで、私にとっては十分なのである」(KdS, I, 517)。この問題については次節で詳しく扱う。

有された「記憶 (Gedächtnis)」としての言語という形で区別して考えている。

人間の認識や思考が言語と同一のものだとすれば、言語とは人類が持つ記憶に他ならない。そして最終的には、抽象的な記憶も抽象的な人類も抽象的な言語も、現実世界には存在しなくなる。存在するのはただ、想起という行為をし、言語活動 [= 言語運動 Sprachbewegung] をおこなう人間個人のみとなるのである。したがって認識とは、人間の言語同様、ひとつの社会的な仮象であり、いうなればそれは社会的な幻想であり、人間集団のあいだでのみ生じるなものなのである。

(KdS, I, 33)

このとき注目したいのは、言語活動における「想起という行為」が、あくまでも「人間個人」を単位として考えられているということである。¹¹⁾ それに対し「記憶」としての言語は、「人間集団のあいだでのみ」通用する「社会的な幻想」としての言語および認識として考えられている。そしてそのような「社会的な幻想」を、マウトナーは「ゲーム」と呼んでいる。その際言語は、ゲームのなかでのみ通用する見かけ上の価値しか持っていないとされる。というのも、マウトナーにとって言語とは、そのつどの社会的慣習によって形作られたゲームのルールにおける単なる「チップ (Spielmarken)」にすぎず、安定した価値を維持するのではなく、そのつど規則の影響を受けて変化してしまう不安定なものでしかないからである。¹²⁾ このルールは、ゲームの参加者がそれに従属すればするほど、より強制的なものとなる。「記憶」としての言語は、主体としての話者自身の個人的な意識によってコントロールされうるものではなく、つねに集団的権力の影響下にあるという点を、マウトナーは強調する。¹³⁾ その際、個人の感覚やそれを想起する行為は抑圧されてしまわざるをえない。「我々のなかで思考しているもの、それが言語である。我々のなかで詩作しているもの、それが言語なのである。しばしば言葉に対して呼び起こされてきた感情、それは『私が思考するのではない。

11) Vgl. Knobloch (1988), S. 221f.

12) Vgl. KdS, I, 115.

13) 『論考』以外の別の箇所でもマウトナーは、幾世代をも経ることでもはや慣習化されてしまった「民衆語」が、「無意識的なものとなってしまった」言語であると述べている。Vgl. Mauthner (1907), S. 118.

それが私のなかで思考しているのだ (Es denkt in mir)』ということである」(KdS, I, 42)。¹⁴⁾

このようにして、マウトナーは個人が持つ世界観と、特定の時代や世界において大勢を占めている世界観を、厳密に区別しようとする。¹⁵⁾ というのも後者は、その時代において有力なものとなっている理念や先入観の影響下につねに置かれており、偶然が個々人の感覚上で織り成す「物理的な複合体」の「多相性」(KdS, III, 233) とは決定的に異なるものにならざるを得ないからである。マウトナーが言語によるコミュニケーションの不可能性を主張するのは、言語活動において想起されているはずの個人の運動感覚が、そのアーカイブとしての集団的記憶のなかで、正しく同じように反復されることがないからである。複数の人間がそれぞれ行う想起のあいだには、架橋不可能な断絶が存在し、それゆえコミュニケーションによる相互理解は決して成立することがない。成立しているように見えたとしても、それは「社会的な幻想」でしかない、とマウトナーは主張する。

このような言語[Sprache]における言葉[Worte]は、伝達内容と完全に一致するものではない。というのも言葉とは想起であり、2人の人間が同じ想起を行うことは決してありえないからである。言語における言葉は、認識とも完全に一致するものではない。というのも、どんな言葉もそれぞれ、言葉自身が持つ歴史という共振音に付きまといわれているからである。最後に、言語における言葉の数々は現実世界の本質の奥深くへと入り込むのに適したものではない。というのも、言葉というのは単に我々の諸感官を想起するためのしるし[Erinnerungszeichen]に他

14) 『論考』本文に注などはつけられていないため推測することしかできないが、この「それが私のなかで思考しているのだ」という引用は、ニーチェの『善悪の彼岸』における次の一節から影響を受けているように思われる。「それが考える (Es denkt)。しかしこの『それ』はまさにあの古く名高い『私』であるというのは、おだやかに言っても、単なる仮定、単なる主張に他ならず、とりわけ『直接的確実性』ではない。結局この『それが考える』でさえすでに言い過ぎなのである」(Nietzsche(1886), S. 25)。またマウトナーがニーチェから多大な影響を受けていたことについては、Bredeck(1984)およびKampitz(1990)を参照することができるが、両者とも直接この箇所について言及しているわけではない。さらに互(2010)は、この「それが考える」における es をめぐり、リヒテンベルクに端を発する思想史的な系譜が形作られることを明らかにしている。マウトナーがこの「系譜」に入るかどうかという問題に本論で立ち入ることはできないが、es の問題が主語および主体としての「自我」に対する批判を含んでいるとすれば、ここで問題となっているマウトナーの言語観とも大いに関係しているように思われる。

15) Vgl. KdS, III, 233.

ならないからである[...]。(KdS, III, 641)

したがってマウトナーにとって、「言語における言葉」とはコミュニケーション行為における媒介として両者をつなぐものではなく、むしろ反対に個としてのお互いを切り離すものである。「大陸間の海洋のように、言語は個々の人間のあいだで揺れ動いている。海は諸国間を結びつけていると言われている。というのも、ときおり船が諸国間を行き来し、たどり着くからである。その船がその前に沈没してしまわなければの話なのだが」(KdS, I, 40)。マウトナーの言語観によれば、このような「船」としての言語は、十全にその伝達機能を発揮するわけではなく、「沈没」することもある。ここでは言語による「意味」の伝達機能は、「個」としての主体に対して、完全に独立したものとして捉えられている。

このような背景にもとづき、マウトナーはさらに「言語とは使用される対象でも道具でもなく、そもそも対象ですらない。それは使用そのもの以外の何ものでもない」(KdS, I, 24)と定義する。ここで言語が「対象 (Objekt)」ではないということが示しているのは、言語が「主体／客体 (Subjekt/Objekt)」という関係に捕らわれることがないということであり、主体に従属するものではありえないということに他ならない。言語は社会的集団のなかで使用されることでその「意味」を蓄積させていき、「言葉自身が持つ歴史」を形作っていく。しかし『論考』において、認識やコミュニケーション手段としての集団的言語は、言語活動における個人による感覚の想起から完全に切り離され、区別されている。このようにしてマウトナーは、個人の感覚とその想起を「非言語」の側に位置づけている。それらは、コミュニケーション行為において決して伝達されることも表現されることも、したがって理解されることもないものとみなされている。

このようにして見てくると、マウトナーの言語批判において、言語と知覚とのあいだの関係が、非常に重要な意味を持っていたことがわかる。そこで次は、マウトナーにおいて言語と知覚のあいだにどのような関係性が作り出されているのかについて見ていきたい。

3. 知覚と「詩」

すでに述べたようにマウトナーは言語活動を、外界に対する能動的かつ物理的

な運動、およびその感覚の想起として説明している。このような徹底した感覚主義にもとづき、彼の言語観において「真理」や「現実」といった概念は、すべて知覚神経の外界に対する反応へと還元される。¹⁶⁾ ここには明らかにエルンスト・マッハによる経験批判論の影響が見出される。実際にマウトナーは、マッハとの文通¹⁷⁾ や自伝のなかで、自らの言語批判とマッハの理論とのあいだの深い関係性について次のように書いている。「マッハの認識論的実証主義は、オーギュスト・コントのように形而上学的な言葉を嫌うのではなく、心理学的に記述することで説明している。それは私の潜在意識のなかで、後々まで影響を及ぼし続けたのだった」。¹⁸⁾

マッハの立場を一言で言えば、感性的要素を中心とした一元論である。例えば、「物体が感覚を産出するのではなく、感覚複合体（要素複合体）が物体をかたちづくる」のであり、よって、「あらゆる物体は感覚複合体（要素複合体）を思考するためのシンボルにすぎない」。¹⁹⁾ そして「自我」もまた、「一次的なものではなく諸要素（感覚）」である。例えば、「私が緑を知覚するというのは、緑という要素が他の諸要素（感覚や想起）からなるある種の複合体のなかに現われるということ」であり、したがって、「自我は、不変の、確定した、はっきりと区画された統一体ではない」。²⁰⁾ これらのマッハの言説からもあきらかなように、言語を感覚の想起として考える際にマウトナーが念頭においているのは、マッハによる自然科学における概念批判である。マッハは「物体」や「自我」といった例に代表される諸概念が、決して実体的なものではなく、科学の分野において「事実」をもっとも簡潔に表現し、「最小の出費で事実をできるだけ完全に記述する」「思考経済の原則」²¹⁾ にもとづいて作られた「即興的な虚構」²²⁾ にすぎないことを強調する。

マウトナーもまたこのような虚構性をさらに懐疑的に追求し、言語の非実体性を主張している。言語とは彼にとって、感覚を想起するためのしるしにすぎない。

16) Vgl. KdS, I, 695f.

17) Brief von Fritz Mauthner an Ernst Mach am 4. Dezember 1901. (Vgl. Thiele (1966), S. 80f.)

18) Mauthner (1918), S. 210.

19) Mach (1885), S. 20.

20) Ebd. S. 17f.

21) Ebd. S. 19.

22) Mach (1903), S. 3.

そして外界から受けるそのような感覚とは、偶然の産物にすぎないものであり、マウトナーはそれを「偶然感覚 (Zufallssinne)」と呼んでいる。

我々の五感は無偶然感覚であり、このような偶然感覚の想起から成り、あらゆる認識可能なものを隠喩的に征服することによって拡大している我々の言語というものが、現実に対する直観を与えることは決してできない、ということを我々は説いているのである。(KdS, I, 114)

感覚が無偶然なものではなく、世界認識がそのような偶然感覚の「秩序付けられた総体」(KdS, II, 396)に他ならないというところから、マウトナーは言語や思考による世界認識の不可能性を説いている。ふたたび問題となるのは、想起による偶然感覚の再現不可能性である。知覚されたものが音声言語や文字言語へと分節化され、言語化されたとしても、それはあくまでも「ある一定の段階まで慣習化された分節化＝言語化 (Artikulation)」(KdS, III, 59)でしかなく、現実世界で受けた感覚的印象やその想起とは異なる。つまり「個人」のレベルで生じる偶然感覚の表現とは、マウトナーによればつねに慣習的な想起のしるしとして、集団的権力のなかで変形されたものでしかありえない。その意味で、ここにも「個人／集団」という対立関係を見出すことができる。「客観的な世界」から得られた偶然感覚は、知覚神経と言語という二重の媒介を経るなかで、「想像しうる内実を一切もたない」抽象へと化してしまうのである。

我々が持つ客観的な世界についての知識は、我々の偶然感覚に対する主観的なイメージとなってしまったのである。いまや主体もまた消え去り、客体の背後で沈んでしまう。[...]個人という概念もまた、想像しうる内実を一切もたない、言語による抽象となってしまったのである。(KdS, I, 663)

このように見ると、マッハの影響を強く受けたマウトナーの言語批判において、主体としての「自我」が感覚データの総体として解消されているのも当然のように思われる。しかし実際には、マウトナーはマッハとはまったく逆の方向に進む

ことになる。マッハが自我を「救い得ない」²³⁾ とみなしたのに対し、マウトナーは表現主体としての「個人」を、ひとつの表現形式を他の表現形式から区別し、例外化することで、いわば救済しようとするのである。²⁴⁾ すなわち、唯一「詩人」だけが、偶然感覚という本来再現不可能なものを、芸術的に再現し、表現する能力に長けた者として認められるのである。偶然感覚の想起としての言葉は、こうして「詩 (Poesie)」とみなされることになる。

詩は言葉によって、つまり間接的に惹き起こされ、高められた感覚的刺激には欠かせないものである。より端的に言えば、詩とは言葉を通じた享楽[Genuß]である。詩人の詩そのものは、言葉なしに成立しうる。それは想像を通じた享楽であり、自堕落な享楽である。もし詩人がみずからの想像による享楽を他者に伝達しようと欲したとすれば、[...]彼には言葉しか残されていないのだ。[...]詩とは、言葉による感覚的刺激なのである。(KdS, I, 98)

マウトナーにとって、「詩」は唯一「あらゆる特別な感覚エネルギーを、イメージへと再生産させる」(KdS, I, 99) ことのできる芸術である。それどころか、「詩」は言葉を通じた「感覚的刺激」そのものとしてすら捉えられている。それはあたかも、言葉によって「直接」感覚器官を刺激することで、感覚印象を他者へと伝達し、それを再現することができるかのようなようである。「詩人は言葉によって、イメージが持つ一段と高められた感覚的刺激を生み出すのである。彼は、世界の開闢からその終焉にいたるまで、自らが見聞きしたものを語っているのである」(KdS, I, 105)。人間の言語における「唯一の課題」を、「対象の現前なし」でも「あらゆるイメージを再度生産する」(KdS, I, 104) ことであるとするマウトナーにとって、「詩」の言語は単なる理想というだけではない。彼は言語の本質そのものを「詩」のなかに見出しており、その意味で言語は「芸術手段」(KdS, I, 104) そのものである。したがって、「詩」の言語は認識の言語から厳密に区別されなければならない。

23) Ebd. S. 20ff.

24) Vgl. Arens (1995), S. 100.

[...]つまり、我々のイメージを想起するためのしるしが、芸術における伝達を目的として用いられる場合、それは直接的な観照とより一層深い関係にあるにちがいない。そして、同じ記号が認識のための伝達という目的で用いられる場合、その本性＝自然[Natur]からはより一層遠く離れていってしまうと言えるだろう。芸術はより自然主義的[naturalistisch]かつ直観的なものになり、言語はより超自然主義的[supernaturalistisch]かつ概念的なものになるのである。(KdS, II, 539)

しかし「詩人」を例外化することによって、「詩」の言語を区別しようというこの試みは、大きな矛盾を抱え込まざるをえない。非言語的なものとしての「偶然感覚」は、言語によって再現することはできないはずなのだが、「詩人」だけは例外的に、この二項対立のあいだに存在するとされる断絶を架橋し、そのあいだを自由に行き来する特権を与えられている。これは先行研究が指摘するような、作家としての「失敗」からくる詩人への憧憬や、稚拙な理論構築のせいで生じる単なる論理的矛盾という以上の意味を持っているように思われる。というのも、マウトナーが言語批判における最大の目的を、「自己解放」としての「言語からの解放」(KdS, I, 713)と考えている限りにおいて、「詩人」の例外的特権は、唯一「個人」としての「自己」を、言語から「解放」する可能性を持った、言語批判の最終目標そのものに他ならないからである。

したがって、言語と知覚、および「詩」のあいだの関係性においても、「詩人」という像を中心に、主体としての「個人」の問題が重要視されている。「偶然感覚」という用語が前提としているのは、「外界は現実と可能性の数々、および諸要素や諸力からなる海洋である」(KdS, I, 328)という、マッハの影響を強く受けたマウトナーによる外界に対する理解であった。マッハの経験批判論にもとづけば、外界からの知覚は、「自我」によるコントロールが不可能なものとして捉えられる。それゆえに、「主体／客体」のあいだの関係性は転倒してしまう。しかしマウトナーは、「科学」に対し「詩」を対置することによって、再度それを転倒させる可能性を模索するのである。「詩人」は、外界からの刺激としての「偶然感覚」を、他者へ伝達したいという意志を発端として、芸術を通じて表現することができる。こうして「詩人」の言語は、慣習的な権力の影響下から唯一逃れる可能性をもった言語として、認識や科学の言語からは区別されるのである。

4. 言語の修辞性と「詩人」のメタファー

では、マウトナーの言語批判における、芸術としての言語とはどのようなものなのか。マウトナーの言語批判において、言語を用いることで、偶然感覚によって生じる印象をイメージとして再現する可能性が、唯一「詩人」には見出されていた。しかし、あくまでもこれは「詩人」に特有の能力であり、彼以外の言語は「像」ではなく、「像の像の像」でしかない。

言葉は像を与えるのでも、像を呼び起こすのでもない。像の像の像でしかないのである。[...]あらゆる個々の言葉は、自ら固有の歴史を内に宿している。そしてあらゆる個々の言葉は、メタファーからメタファーへと、終わりのない変転の内にある。(KdS, I, 115)

マウトナーによれば、あらゆる言語、およびそれによって生じた概念は、多義的にならざるを得ない。というのも、それは常に変転するカオスとしての「現実」における、「漂い動き未決定な (schwebend)、非同一的で、隣接するイメージ」(KdS, I, 91) を想起するためのしるしにすぎないからである。「言語とは、流動的な形式によって、流動的な存在を認識しようと欲するものである」(KdS, II, 151)。このような「非同一的で、隣接するイメージ」を想起するためのしるしとして、絶えず流動的に変化する言語の機能を、マウトナーはメタファーに代表される修辞的な操作として捉えている。彼ははっきりと、「言語とはメタファーである」(KdS, II, 453) と定義する。それによれば言語とは、感性的要素に起因するメタファーに他ならない。そしてそのことがふたたび、言語による世界認識の不可能性というテーゼの根拠とされる。

我々が自らの世界認識において客観的だとみなしているもの、それはまったくもって主観的なものである。我々が外界について知っていることは、決して客観的な知識ではなく、つねにひとつのシンボル、ひとつのメタファーなのだ。我々がその「比較のための第三者 [Tertium comparationis]」へと到達するのは不可能である。というのも、メタファーは我々の感性の活動によって押し付けられたものだからである。(KdS, I, 338f.)

マウトナーによれば、言語がメタファーに他ならないということは、「客観的な」事実についての表現が修辞性という媒介を経ざるをえないがゆえに、かならず差異を含み込んでしまうということである。そしてこのような差異は、個々の「主観」のあいだにも生じる。マウトナーは、メタファーとしての言語を通じた伝達において、同一の像やイメージを共有することは不可能だと考えている。

類似性に気づく可能性、そして短く効果的な照応関係をメタファーによって表現する可能性が、個々人の世界像から生じる。聞き手が話者のメタファーを理解することができるのは、同じ精神状況、同じ世界像によって、聞き手が同様に照応関係を活性化させることが出来る場合だけである。しかし、2つの同じ精神状況は存在せず、したがってある者の頭のなかにあるメタファーが、もう一人の頭のなかにあるメタファーと完全に一致することは決してないであろう。(KdS, III, 240)

すでに述べたように、マウトナーは人間の言語における「唯一の課題」を、「対象の現前なし」でも「あらゆるイメージを再度生産する」(KdS, I, 104) ことだと考えている。しかしそれにもかかわらず、メタファーとしての言語によって、その課題を達成することは不可能であると彼は宣告する。アリストテレス以来の修辞学の伝統において、メタファーが「生き生きとしたイメージ」を「眼前に彷彿とさせる」²⁵⁾ ものとして定義されてきたことを考えると、マウトナーはここでメタファーに対し、それとは真逆の性質を付与しているといえる。語源的には「移行」を表すギリシャ語 *metaphrein* に由来するメタファーは、不在の対象とそれを表現するためのイメージのあいだを架橋する、認識にとって有用な修辞的技法として考えられてきたのに対し、²⁶⁾ マウトナーはそのような架橋および移行の可能

25) Aristoteles (2002), III, 1411b. Vgl. Campe (1997), S. 214.

26) Vgl. Kimura (2010), S. 21f. またタルケンは、メタファーの認識論的有用性という観点から、『論考』におけるメタファー批判を批判している。彼の指摘によれば、マウトナーの説明の随所に、メタファーや文学的表現の数々が見出される。それらのメタファーは『論考』において、「認識の不可能性を認識」するために用いられている。それにも関わらず、マウトナー自身はメタファーによる認識の可能性を否定している。それゆえ、マウトナーのメタファー批判には根本的な矛盾が生じている、とタルケンは主張している。Vgl. Thalken (1999), S. 239.

性を否定し、むしろそのあいだに断絶をみとめようとするのである。

さらにマウトナーは、このような断絶が歴史的に形成されたものだと考えている。前節でもすでに述べたように、感覚を想起するためのしるしとしての言語は、繰り返し使用されることで記憶として蓄積される。その過程において、言語は慣習化してしまい、想起されるべき感覚の表現とは異なるものにならざるをえない。そして想起から記憶への変遷としての慣習化というプロセスは、反復的な刺激が徐々に「衰え弱まり (abschwächen)」、感覚としては感じられなくなっていくプロセスとして説明される。²⁷⁾ また言語の修辞性およびその「自己欺瞞 (Selbsttäuschung)」においても、同じような歴史的過程が物語られる。その際マウトナーは、感覚の想起としてのメタファーが、まだ十全にその再現性を保っていた段階を、いわば「原-メタファー (Urmetapher)」(KdS, II, 452) として、暗黙裡に前提としている。「メタファーは、最初はかならず、自己欺瞞なしにアナロジーを形成する。類似性の強調と、非類似性の無視の上に、人間の言語は築かれている」(KdS, II, 416)。マウトナーにとって問題となるのは、そのような「原-メタファー」が使用されていくなかで、その修辞性がもはや感じられなくなってしまうことである。

いわゆる言語使用における場合と同じように、言語がたどる道は、詩的なあるいは自由なメタファーから、慣習的で必要不可欠な結びつきへと通じている。[...] 言語を歴史的に概観する者は、メタファーが言語感覚から消え去ってしまう瞬間に、いたるところでメタファー的な用法が色あせてしまうのをみとめることになる。(KdS, II, 487)

このように「色あせて (abblassen)」、「退色 (verblassen)」してしまった言語は、もはや個人に生じた感覚印象の「生き生きとした」イメージを伝達することのできない、「死んだシンボル」(KdS, I, 124) でしかない。また、言語を「死んだもの」として見るマウトナーの背景には、書き言葉 (Schriftsprache) に対する独特

27) Vgl. KdS, I, 610f. また、このようなメタファーに対する見方が、ニーチェの『道徳以外の意味における真実と虚偽について』(1873)から大きな影響を受けていることについて: Vgl. Kampitz (1990), S. 33; Spörl (1997), S. 42f.

の理解が存在している。マウトナーは一方で、書き言葉を学術的および「記憶術」の実用性という観点から称揚するが、他方その際、書き言葉は「トーンのない、情感のない、つまりイメージのない (vorstellungslos)」(KdS, II, 575) 言葉として、「生き生きとした言語」に対置されている。この時、「生き生きとした言語」は感覚的印象の想起を可能にする言語として捉えられている。²⁸⁾ それに対し、書き言葉は感覚的印象から切り離されたものと捉えられている。それゆえ書き言葉が「活性化 (Verlebendigung)」(KdS, II, 576) され、感覚的印象の想起へと到達する可能性は否定されている。しかしそれにも関わらず、「詩人」にだけは唯一「活性化」の可能性が認められている。「詩人」は、「書き言葉から生き生きとした言語、すなわちイメージへの移行を生じさせる」(KdS, II, 574) ことができる、唯一の存在としてふたたび称揚される。

つまりここでも「詩人」の特権が発動することになる。マウトナーの言語批判において、「原-メタファー」が「退色」していく過程とは、詩的に利用されていた言語が歴史的過程のなかで徐々に「非-詩的」になっていく過程と並行している。²⁹⁾ 「原-メタファー」とは「詩人」によるメタファーであり、次の引用にもあるとおり、「良いメタファー」に他ならない。「詩における良いメタファーに対しては、基礎となっている照応関係が実際に詩人のイメージから成り立ち、個人的かつ自然な精神的営為から生じたものであれ、ということがつねに要求されるだろう」(KdS, I, 131)。つまり、言語の修辞性が言語的コミュニケーションの障害として、断絶として批判されるのは、修辞性そのものが慣習化され、意識的にコントロールできなくなってしまう限りにおいてである。「我々の言語はメタファーによって増大している。つまり、どんなメタファーも最初は意識的に用いられる。しかしあらゆるメタファーは、それがもはやメタファーとして感じられなくなったときにはじめて、メタファーによる増大として、言語という機構のなかに入り込むのだということが言えるだろう」(KdS, II, 451)。したがって言語の修辞性もまた、「個人」による、言語に対する意識的なコントロールの不可能性という問題と結び付いている。そして「詩人」だけは逆に、修辞性を「個人的かつ自然な精神的営為」によって、それをコントロールできるという理由によって、例外として区

28) Vgl. KdS, II, 575.

29) Vgl. KdS, I, 124.

別されているのである。

5. まとめ

以上の分析で扱ったポイントは、マウトナーの『言語批判論考』におけるトピックの一部に過ぎず、彼の大著をすべて網羅するものでは決してない。しかしこれらのポイントは、マウトナーの言語批判における議論が、ひとつの方向性を持っていた可能性を示している。すなわち『論考』において展開されていたのは、「個人」としての主体による言語のコントロール可能性および不可能性に対する批判であり、それを巡る議論だったということである。マウトナーによる「言語／非言語」という二項対立は、「個人」としての主体の「意識／無意識」という二項対立と密接な関わりを持っている。そしてその帰結として、言語批判とはまさに、非言語の側に位置づけざるをえない、すなわち「言葉によって表現できないもの」を語るための回路を、特別かつ例外的な「主体」を用意することにより構築するための、一連の操作のことだったのではないか。

したがって、「詩人」という例外的形象が示しているのは、言語批判そのものが、「言語／非言語」のあいだに不分明な地帯を自ら作り出し、その関係性を実践的に変化させようとした試みだったということである。言語批判は言語という「法」——それはつねにすでに「集団的」権力の影響下にあるがゆえに、「個人」からはもはやかけ離れた、コントロール不可能な「権力 (Macht)」として捉えられていた——を、「詩人」という例外を作り出すことによって一時停止し、変革する可能性を探るものだったのではないか。³⁰⁾ そしてこのような例外状態は、感覚的印象の総体としての外界と言語が結びつく、マウトナーが最も理想とした「言語」のあり方を示しているのである。

30) これと関連して、マウトナーは「言語的無政府主義 (Die sprachliche Anarchie)」という言葉を用いている。Vgl. KdS, II, 515. このようなアナーキズムを実践的にさらに押し進めたのが、マウトナーの大親友だったグスタフ・ランダウアーである。Vgl. Landauer (1978).

6. 参考文献

6.1. 一次文献

Mauthner, Fritz: Die Sprache (Die Gesellschaft. Sammlung sozialpsychologischer Monographien. 9.), Frankfurt a. M. 1907.

Mauthner, Fritz: Beiträge zu einer Kritik der Sprache,

Band 1: Zur Sprache und zur Psychologie, Stuttgart/Berlin 1921.

Band 2: Zur Sprachwissenschaft, Stuttgart/Berlin 1912.

Band 3: Zur Grammatik und Logik, Stuttgart/Berlin 1913.

Mauthner, Fritz: Prager Jugendjahre. Erinnerungen, München 1918.

Mauthner, Fritz: Der Atheismus und seine Geschichte im Abendlande, Band IV, Stuttgart/Berlin 1923.

6.2. 二次文献

Arens, Katharina: Mach und Mauthner: Der Fall eines Paradigmenwechsels. In: Fritz Mauthner. Das Werk des kritischen Denkers, hrsg. v. Elisabeth Leinfellner und Hubert Schleichert, Wien 1995, S. 95-110.

Aristoteles: Rhetorik, dt. Übers. v. Christof Rapp, Berlin 2002.

Bredeck, Elizabeth: Fritz Mauthners Nachlese zu Nietzsches Sprachkritik. In: Nietzsche-Studien 13 (1984), S. 587-599.

Campe, Rüdiger: Vor Augen Stellen, in: Poststrukturalismus, hrsg. v. Gerhard Neumann, Stuttgart/Weimar 1997, S. 208-225.

Eschenbacher, Walter: Fritz Mauthner und die deutsche Literatur um 1900. Eine Untersuchung zur Sprachkrise der Jahrhundertwende Frankfurt a. M. 1977.

Göttsche, Dirk: Die Produktivität der Sprachkrise in der modernen Prosa, Frankfurt a. M. 1987.

Kampits, Peter: Der Sprachkritiker Fritz Mauthner. Vorläufer der ordinary-language-theory oder Nachfolger Nietzsches? In: Modern Austrian literature 23 (1990), S. 23-39.

Kimura, Yuichi: ‚Lebendige‘ Metapher und ‚tote‘ Katachrese im System der klassischen Rhetorik. In: Gakushuin University Studies in Humanities 19 (2010), S. 19-35.

- Kühn, Joachim: Gescheiterte Sprachkritik. Fritz Mauthners Leben und Werk, Berlin 1975.
- Landauer, Gustav: Skepsis und Mystik. Versuche im Anschluss an Mauthners Sprachkritik, Münster/Wetzlar, 1978.
- Leinfellner, Elisabeth/Schleichert, Hubert: Fritz Mauthner, der schwierige Kritiker. In: Fritz Mauthner. Das Werk eines kritischen Denkers, a.a.O., S. 7-10.
- Mach, Ernst: Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Psychischen zum Physischen, Jena 1885 (1. Aufl.); 1903 (4. verm. Aufl.).
- Nietzsche, Friedrich: Jenseits von Gut und Böse. Vorspiel einer Philosophie der Zukunft (1886), in: Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe, hrsg. v. Giorgio Colli/Mazzino Montinari, Berlin 1968, Band. 6.2, S. 1-257.
- Spörl, Uwe: Gottlose Mystik in der deutschen Literatur um die Jahrhundertwende, Paderborn/München 1997.
- 互盛央: エスの系譜、講談社、2010.
- Thalken, Michael: Ein bewegliches Heer von Metaphern. Sprachkritisches Sprechen bei Friedrich Nietzsche, Gustav Gerber, Fritz Mauthner und Karl Kraus, Frankfurt a. M. 1999.
- Thiele, Joachim: Zur Kritik der Sprache. Briefe Fritz Mauthners an Ernst Mach. In: Muttersprache 76 (1966), S. 78-85.
- Weiler, Gershon: Mauthner's Critique of Language, Cambridge 1970.

(きむら・ゆういち 学習院大学非常勤講師)

Die „Dichter“-Vorstellung in der Sprachkritik

Eine Analyse von Fritz Mauthners *Beiträge zu einer Kritik der Sprache*
(1901-1902)

YUICHI KIMURA

Die vorliegende Arbeit unternimmt eine Analyse der Sprachkritik, die von Fritz Mauthner durchgeführt wird. Es handelt sich um drei Punkte; erstens um die Sprache als „Handeln“, zweitens um die Wahrnehmung und die Poesie, drittens um die Rhetorizität der Sprache als Kunst. Die einzelnen Themen beziehen sich immer auf den „Widerspruch“, vor allem auf den zwischen Sprache und Nicht-Sprache, den die meisten Mauthner-Forschungen einfach als einen inneren bzw. theoretischen interpretieren oder kritisieren. Aber es zeigt sich durch die hier vorliegende Analyse, dass dieser Widerspruch eine notwendige Folge der Sprachkritik ist, die immer wieder einen „Ausnahmestand“ zu inszenieren und damit die Grenze zwischen Sprache und Nicht-Sprache zu suspendieren versucht. In diesem Ausnahmestand taucht eine Schlüsselfigur auf: der Dichter.

Mauthner behauptet in seiner Kritik wiederholend die Unmöglichkeit der Erkenntnis vermittelt der Sprache, weil sie nichts als „Erinnerungszeichen“ der Sinneseindrücke sei und also ihre genaue Wiedergabe unmöglich sei. Durch das Erinnerungszeichen sei nur das gesellschaftlich archivierte, konventionell wiederholte Gedächtnis der Sinneseindrücke wiederzugeben. Trotzdem würden sich der Dichter und seine Sprache, und zwar die Poesie, streng von der Sprache der Erkenntnis unterscheiden, denn die Poesie sei der Sinnenreiz als solcher. Mauthner definiert: Einerseits bestehe die Poesie des Dichters selbst ohne Worte, aber andererseits bleibe ihm nur das Wort, wenn er sie anderen mitteilen wolle. Der Dichter erzeuge durch Worte den gesteigerten Sinnenreiz von Vorstellungen und reize sämtliche spezifischen Sinnesenergien zur Reproduktion von Vorstellungen, während das Individuum seine Empfindung nur durch das gefilterte Gedächtnis ausdrücken bzw. wiedergeben könne. In seiner widersprüchlichen Definition ist

also der Dichter die einzige Ausnahme, die frei die Grenze zwischen der Gesellschaft und dem Individuum, dem konventionell geordneten Gedächtnis und der sprachlich nicht auszudrückenden Empfindung, und zwar zwischen Sprache und Nicht-Sprache, überschreiten könne.

Aber womit kann Mauthner den Dichter von anderen unterscheiden? Das hat sehr eng damit zu tun, dass er die Sprache als Metapher erklärt. Für ihn ist die Sprache nur „Bilder von Bildern von Bildern“, weil jede menschliche Sprache ein Erinnerungszeichen an schwebende, ungleiche, benachbarte Vorstellungen sei und also jedes Wort mehrdeutig sei. Aber diese Mehrdeutigkeit werde durch den wiederholenden Gebrauch als das Gedächtnis gespeichert und nicht mehr als die „Täuschung“ gefühlt. Mauthner bezeichnet einen solchen Prozess als „Ablassen“ bzw. „Verblassen“ der Metapher, wobei es um das Vergessen geht, dass die Sprache nur die Metapher ist. Jede Metapher wird zuerst bewusst gebraucht, aber sie wird in dieser Abnutzung der Metapher zur unbewussten. Im Gegensatz dazu stellt Mauthner die Metapher des Dichters in der Poesie als „Urmetapher“ dar, die anfangs immer eine Analogiebildung ohne Selbsttäuschung und deswegen die „gute Metapher“ sei. Es wird immer gefordert, dass die Vergleichung in der Vorstellung des Dichters wirklich bestehe, dass sie aus einer individuellen und natürlichen Geistestätigkeit hervorgegangen sei. D. h., es handelt sich um den Gegensatz zwischen der unbewusst gewordenen unkontrollierbaren Metapher und der bewusst vom Dichter zu kontrollierenden, poetischen Metapher.

Mauthner kennzeichnet deswegen den Dichter durch seine bewusste Kontrollierbarkeit der Sprache und die freien Überschreitungsfähigkeit der Grenzen zwischen Sprache und Nicht-Sprache. In diesem Sinne funktioniert der „Widerspruch“ in seiner Sprachkritik als eine einzige Bühne, auf der nur der Dichter als Ausnahme zu inszenieren ist. Seine Sprachkritik ist damit ein Akt der Konstruktion des besonderen Subjekts, das das „Unsagbare“, also Nicht-Sprache, durch die Sprache noch einmal ausdrücken kann.

